

# 秋季総体大阪大会 (10/7・8 万博) RESULTS

## <男子の部>

3年100m 堤 11:65 (+2.0) <準決勝> 11:52 (+3.7)  
2年200m 岩下 24:53 (+0.3) <準決勝> 24:72 (+3.2)  
2年3000m 名畑 10:26:17  
2年110mYH 神原 18:59 (+2.5)  
3年110mYH 松尾 18:85 (0)  
1年4×100mR (矢吹・三浦拓・植田航・大井) 51:56  
共通4×100mR (高須賀・堤・藤井翔・岩下) 46:18  
1年走り高跳び 植田航 1m35  
2・3年走り高跳び 金川 1m65  
1年走り幅跳び 三浦 4m95 (+1.5) <決勝> 5m27 (+2.5) 3位  
2年走り幅跳び 樫本 5m32 (+2.8)  
3年三段跳び 藤井翔 NM  
2年砲丸投げ (5kg) 東山 NM

公認 5m24 (+0.9)

## <女子の部>

1年100m 畑中 13:35 (+0.7) <準決勝> 13:54 (+2.4)  
2年100m 山本祐 13:14 (-0.7) <準決勝> 12:82 (-0.5)  
<決勝> 12:65 (+1.3) 2位  
3年100m 西尾 12:45 (+1.2) <準決勝> 12:16 (+4.1)  
<決勝> 12:35 (+2.0) 2位  
2年200m 山元 28:00 (+0.7) 森定 28:99 (+2.0)  
<準決勝> 山元 28:11 (+4.4)  
1年800m 梶山愛 2:35:18 阪田 2:38:91  
2年800m 美濃部 2:30:99  
2・3年1500m 前田 4:50:97 <決勝> 4:40:79 2位  
2年100mJH 村上 15:74 (+1.4) <準決勝> 15:40 (+2.8)  
3年100mJH 佐藤由 17:21 (+1.1)  
1年4×100mR (小林咲・伊東・緒方・平岡) 56:49  
共通4×100mR (金子・山本祐・立石・西尾) 49:73  
<決勝> (金子・山本祐・立石・西尾) 49:06 1位  
2・3年走り高跳び 木下 DNS  
2年走り幅跳び 服部 NM  
3年走り幅跳び 福島 5m14 (+0.5) <決勝> 5m34 (+1.7) 2位  
2年砲丸投げ (2.7kg) 岡本 NM

3年砲丸投げ(4kg) 秋澤 NM

<男子学校対校の部>

1位 咲くやこの花 30点 2位 淀川 26点 3位 茨木西 17点  
4位 佐井寺 16点 5位 新北野 15点 6位 三稜 14点

<女子学校対校の部>

1位 咲くやこの花 50点 2位 東雲 26点 3位 枚方四 18点  
4位 赤坂台 18点 5位 西陵 14点 6位 枚方山田 13点

## 秋季総体大阪大会を振り返って

○ 共通女子リレー決勝。昨年のこの大会で優勝している東雲が2連覇を狙うレースとなる。さらに大きな目標があった。それが大会記録49秒03(1999年東香里)の更新である。夏の選手権で48秒28の神がかりとも言える大記録を出した東雲であるが、48秒台の記録を出すことは容易ではない。全国の決勝という大舞台を経験した後、それを上回る刺激がなくパフォーマンスもやや低下ぎみで、2週間前の茨木三島の決勝では50秒を切れない状態であった。折しも、文化発表会、体育大会の取り組みで練習が不足している。最後の大会で負けては意味がないと思い、少ない時間の中でリレーの足合わせにもいつも以上に大きな指示を送った。バトンが渡る直前にスピードが低下するので、バトンを渡してもそのまま次走者を追いかけるように何度も反復練習させたのだ。

「負けてはならない」本能的に思ったのは、それだけ咲くやこの花と登美丘の力を高く評価していることの裏返しでもある。朝一番の予選では登美丘が49秒97、咲くやこの花が50秒18、そして東雲が49秒73。予想どおり予選からハイレベルの混戦となった。

16時20分。大会最終日の最終種目は男女リレーの決勝である。他の種目はすべて終わっていて、競技場全体がこのレースに注目することになる。5レーンに咲くやこの花、6レーンに登美丘、7レーンに東雲。ピストルが鳴ると、いつものように金子が好スタートを切る。それでも、登美丘、咲くやとの差はほとんどない。バックストレートを疾走する第2走者の走りも圧巻であった。咲くやの寄田選手、登美丘の杉山選手は外側のレーンで前を走る祐莉を懸命に追いかける。祐莉の前には8レーンの100m日本中学チャンピオンの川崎選手。迫力満点の光景であった。そのまま3チームがほぼ同時に第3走者にバトンが渡る。バトンもスムーズで立石の走りも悪くない。それにもかかわらず、すぐ内側の登美丘の第3走者がぐんぐんスピードを上げて首位に躍り出る。「東雲に絶対に勝つ!」という気迫のこもった走りである。第4走者へのバトンパ



スでもスピードが落ちない。そのまま、真っ先に登美丘にバトンが渡る。登美丘の第4走者が走り出したのに、西尾がなかなかスタートを切らない。ようやく、西尾がスタートを切る。10mほどの差があったかも知れない。西尾はバトンを受け取ると、いつもと同じで宙を飛ばすように猛スピードで走り出す。中間点あたりを過ぎて、差は詰まっているもののまだ明らかに差がある。大阪大会の決勝に残るリレーチームのアンカーはみんな速いに決まっている。一瞬、負けを覚悟した。ラスト10m。西尾のギヤがさらに上がる。あっと言う間に登美丘のアンカーをとらえると、そのまま風のようにフィニッシュラインを駆け抜けた。1位東雲、49秒06。2位登美丘、49秒17。3位咲くやこの花、49秒57。東雲は大会記録にわずかに100分の3秒届かなかったが、及第点以上の走りであったのだ。「信じられない」というような顔つきで肩を落とす登美丘のアンカー。西尾のところに駆け寄って祝福しようとしたのだが、西尾は第2コーナーに目をやると、脱兎のごとく（逃げ出すウサギのように速いこと）走り出した。そしてまたびよんびよんとこちらに走り寄って来て、「先生、（金子）里穂ちゃんが肉離れをしたみたいです」と言う。自分も第2コーナーまで移動すると、足を引きずる金子が居た。「カーブをまわったところで（太腿の裏を）肉離れしたみたいです」と、顔をしかめる。西尾は「（金子を）おんぶした方がいいですか」というと、ユニフォーム姿のままおんぶをして、また本部席の方に走り出したのだ。西尾が登美丘のアンカーをとらえたときに、競技場全体が息を呑んだあと、歓声があがっていたのだ。本部席にいた審判の先生も訳のわからない感嘆の声をあげて、信じられないようすで首を振った。まさに大阪中体連陸上の歴史に残る快走でなかったか。それなのに、その余韻に浸る間もなく、いつものように忙しそうに動き回る西尾を見て、苦笑まじりに目を細めていました。

感動の表彰式が始まった。通信大会、選手権大会、そしてこの総体と、大阪大会の表彰台に同じ3チームが上がる。まさにしのぎを削った好敵手であった。東雲にしてみれば、この2チームとの激戦があったからこそ、日本ランキング1位の記録で全国大会に

臨むことができたのだ。表彰セレモニーでも登美丘の選手は泣いていたが、セレモニーが終わったあと、「3チームでいっしょに記念撮影しよう」と持ちかけた。この時は笑顔の12人の選手たち。日本でもトップレベルの激戦を戦い抜いた者だけがわかる熱い思いがあり、今日のレースでその厳しい戦いが終わったことで、やり切った充実感が生んだ満面の笑顔でもある。東雲の4人もこのメンバーでバトンをつなぐことは永遠にないはずだ。正直淋しくなるけど、感謝の気持ちでいっぱいになった。



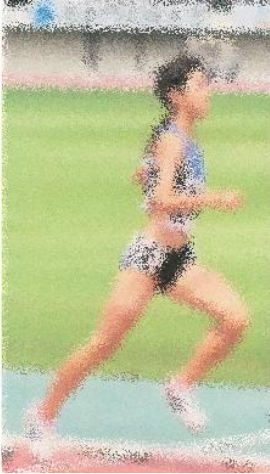
○ 大会2日目。3年女子走り幅跳び決勝。午前中の予選ラウンドの1本目で5m14を跳んで、予選通過記録4m70をあっさり越えて、トップ通過を果たした福島。夏の通信は7位入賞したものの、選手権は決勝で9位。さらに上のステージを狙っていた福島にとって、ここまでは不完全燃焼の2012年度トラックシーズンと言える。朝1番の練習の時から、好調ぶりを感じていた。もともと福島はダイナミックさこそないが、踏み切った力を効率良く地面に伝えて、その反発を上手にもらうことができる選手である。最後の大阪大会で表彰台に立つことは本人も指導者も同じ思いであった。

注目の1回目。ファウルではなく、好記録を出しておくことがフィールド競技の鉄則である。追い風2.1mで5m02を記録。早くも決勝進出者13名の中でトップに躍り出る。1回目の跳躍を終えて、5mを越えたのは福島ただ1人。いい流れの中で、2回目の試技を迎える。福島の右手が秋空に向かって高く手があがって「いきまーす」の声。メインスタンド最前列に陣取る東雲応援団から「は〜い」の返事。意を決して助走を始める福島。スピードがどんどん上がり、踏み切り板をしっかりとらえて、力強く踏み切った。福島の体が青い空に吸いこまれるように放たれる。大きな放物線を描いて、福島が着地すると砂が飛び散った。審判の白旗が上がって、好記録を確信した。「5m34」のコールに福島も笑顔。追い風1.7mで公認記録となる。全国大会参加標準記録にわずか1cmと迫る大幅自己ベスト。駆け寄って笑顔で祝福してやりたい気持ちがあったが、まだ競技は終わっていない。ここで喜び過ぎて、集中力を途絶えさせたくないと思い、静かに見守った。3回目に東我孫子の選手が5m38を跳んで逆転される。福島の3回目はファウル。ベスト8に入って、福島の試技順は7番目。攻めのジャンプで5m越えを連発するが2位のまま。迎えた6回目の跳躍。このシーンを目に焼きつけようと静かに見守った。メインスタンドの集団応援がうるさくて焦れた。福島は落ち着いてしっかりと踏み切り板をとらえて大ジャンプ。審判の計測に息を呑んだが、記録は5m29と発表された。福島の2位が確定した。最後のジャンプを終えると、目にいっぱい涙を溜めていた。「よくやったね。お疲れ様」と声をかけるとこらえきれなくなって涙を落とす。見事な中学校生活最後の引退試合となった。表彰式ですがすがしい笑顔の福島。松山でおこなわれた春の中体連強化合宿では、練習ができずに宿舎と競技場を何度もお遍路さんみたいに歩いて往復していた選手。春先から続く故障を乗り越え、そ



れを克服したからこそわかる境地がある。だからこそ、祝福の拍手を心からめいっぱい贈ったのです。

- 「陸上競技で取ってはならない順位がある。それは2位、4位、9位である」とよく言われる。2位は優勝を、4位は3位までの表彰台を、9位は入賞、もしくはベスト8を逃すことになるからで、ひとつ上の順位の優勝、3位、8位とは雲泥(うんでい)の差があるからである。そのとってはならない順位の2位を先に紹介した福島を入れて4人の選手がとることになってしまった今大会。



2・3年女子1500mに出場した前田。大会初日の予選では終始、持ち前の積極的なレース展開で、4分50秒97で余裕のトップ通過。今大会には高松望ムセンビ選手が出場していないだけに、前田にとっては大阪大会初優勝が現実味を増してきたことになる。大会2日目。15時55分。2・3年女子1500m決勝。詳しい話は省略するが、自分の持ち味である積極的なレース展開を大事にすること、ラストスパートのタイミングについて、事前によく2人で話し合ってから前田を決勝のスタートラインに送り出したのだ。号砲が鳴ると、前田はいつものようにするすると前に出て先頭に躍り出る。その後は、小刻みに先頭が入れ替わる混戦のハイペースが

続いた。ラスト1周の鐘が鳴った。この鐘を合図に決めていたかのように、枚方長尾の新家選手が猛然とスパートをかける。少し離れる場面もあったが、落ち着いて前田は追いついていった。バックストレートで、今度は千里丘の渡辺選手が渾身のラストスパート。前田はここも上手に対応して渡辺選手のすぐ後についた。2人は第2曲走路へ。そのカーブの頂点、ラスト150mあたりで、今度は前田がラストスパート。このギャチェンジに渡辺選手がついていけない。2人で打ち合わせた台本どおりの展開に胸を躍らせた。ホームストレートでは5mほどの差になり勝利を確認した。ところが、渡辺はあきらめていなかった。もう一度、疲れた体にムチを入れて、前田との差を縮め始めたのだ。フィニッシュライン手前1mあるかないか、渡辺選手と前田の体が重なり合うよう



にフィニッシュ。正式発表までの時間に焦れた。表示板が渡辺の勝利を告げた。わずかに100分の10秒の差で前田が負けたのだ。泣き崩れる前田。3位に飛びこんだ前田と大の仲良しの峰塚の早田選手が、前田を抱きかかえるようにして慰めるが、前田は泣き止まなかった。表彰式でも涙が止まらない。

前田がベストを尽くしたことは間違いない。ただ、勝利に対する執着心がほんのわずか渡辺選手の方が上回った結果であると受け止めた。陸上の神様が最後の最後に前田に与えた100分の10秒。強さをがむしゃらに欲しがると

ではなく、弱さを乗り越える力を身につけて、さらに大きく成長する選手になることを強く願っている。

- 3年女子100mでは西尾が、2年女子100mでは山本祐莉が決勝とともに2位。表彰台のてっぺんにあがれなかった。西尾は日本一の芝谷の川崎選手が相手だから、仕方ないという考え方もあるが、「1度でいいから、咲良ちゃんに勝ちたい」という思いもあるはずだ。昨年までの100mの大阪中学記録は12秒15。この記録を8月の近畿大会で川崎が12秒05にまで更新した。西尾も9月のジュニアオリンピック挑戦記録会で従来大阪中学記録を破る12秒11の記録を叩き出している。川崎も西尾も条件さえ合えば11秒台が出るはずだ。そのチャンスがこの総体とジュニアオリンピックではないかと考えている。西尾は予選から好調で後半流しながら12秒45。準決勝では追い風4.1mながら、12秒16である。予選、準決勝ともに記録的には川崎よりも上でランキングトップで決勝を迎えることになった。迎えた決勝。追い風が強いコンディション。たとえ追い風参考記録になってもいいから11秒台の記録が欲しかった。西尾にもレース前に確認している。5レーンに川崎、6レーンに西尾。三島地区大会も含めて、これまでに何度この戦いを見てきただろうか。ピストルの閃光とともに勢い良く飛び出した。スタートはイーブン。中盤あたりで川崎選手が前に出る。後半が得意である西尾は、その差を詰め切ることなしにフィニッシュ。1位川崎選手12秒23。2位西尾12秒35。追い風2.0m。余分なことを意識させた自分が悪いと反省した。珍しく、西尾がリキんでしまったのだ。それでも、さらに上を目指してリキんででも頑張った経験は、次のジュニアオリンピックでも必ず生きるはずだ。



2年女子100mは、始めから激戦が予想された。先のジュニアオリンピック挑戦記録会で競り合った4人の中で、中宮の西田選手が2年200mにまわり、しかも大会新記録で優勝する健在ぶりを見せた。この100mでは当然山本祐莉、咲くやこの花の寄田選手、西陵の佐々木選手の3人の混戦となる。この3人が順調に決勝ラウンドに駒を進め、決勝レースのシードレーンに登場した。4レーンに祐莉、5レーンに佐々木選手、7レーンに寄田選手。ピストルが鳴ると、8人のファイナリストがきれいにスタートを切った。スタートダッシュを得意とする祐莉もいつものおりの走りで前に出る。中盤を過ぎて、寄田選手が前に出た。滑らかな接地で効率良く前に進んでいく。そのまま寄田選手がトップでフィニッシュ。1位寄田選手12秒54、2位祐莉12秒65、そして3位に佐々木選手12秒81。完敗で



あった。先のジュニアオリンピック挑戦記録会でも薄氷の勝利であったことを改めて認識した。それでも悲しんでばかりはいられない。1時間後にはリレーの決勝が始まる。この日、祐莉にとっては5本目の100mとなる。その条件は寄田選手も佐々木選手も同じ。「気持ちを切り替えて、リレーの決勝レースにのぞめ！」の声に、祐莉は今一度、表情を引き締めて黙って頷いたのだ。

- 1年男子走り幅跳びに出場した三浦が決勝で3位。東雲男子で唯一の得点をあげた。この種目の予選通過記録は5m00。予選ラウンドで三浦は1回目に跳んだ4m95がベスト。3回の跳躍で5m00以上を跳ぶことができなかった。それでも予選1組、2組を通じてこの通過記録を突破したのは7人だけ。決勝ラウンドは最低12名でおこなう



ことになっているので、残り5人が記録上位者で拾われていく。三浦の記録は全体の9番目の記録であり、決勝ラウンド進出を果たした。注目の決勝ラウンドの1本目。いきなり、自己新記録の5m08を跳ぶ。ガッツポーズをする三浦に「喜び過ぎたらダメ！集中力が途切れる!!」と、坂田先生。同感である。三浦は2回目に5m12、3回目に5m27まで記録を伸ばすと、いったんはトップに躍り出る。実戦を重ねるごとに、跳躍の技術が上がっていくのがよくわかる。その直後に交野三の選手が5m31を跳び、5回目には豊中一の選手が5m35を跳ぶ。結局、大幅自己ベストで3位入賞。2年後に全国大会に出場するような選手になることを願って、表彰台に立つ三浦に大きな拍手を贈った。

- 「大阪大会準決勝落ち」のトラック選手が5人もいる。とりわけ1・2年生はこの結果をどう受け止めるかで未来予想図が大きく変わるはずだ。1年後の自分が大阪大会のファイナリスト、あるいはさらに上の近畿・全国に出場するような選手になることをまずは明確にイメージすることからすべてが始まると考えて良い。イメージが出来たらあとは逆算しながら、時の流れを遡（さかのぼ）ることである。夢実現する前の1ヶ月前の自分、2ヶ月前の自分……、半年前の自分、そして1年前の自分、その時点で何を徹底していけばいいかを常に考えることである。2年100mJH準決勝で追い風参考ながら、15秒40のハイレベルな記録で決勝進出を果たせなかった村上はこの悔しさを心に刻みこむべし。来年は全中出場を果たし倍返しをしてやろうじゃないか。2年200mに準決勝落ちした山元も同じ。山元も大阪大会ファイナリストになるくらいでないと、女子リレーの3連覇はきびしくなると感じているはずだ。1年生の畑中は予選で13秒35の自己ベストはお見事でした。決勝進出にも手応えがあったけれど、前半まわりが速くてリキんでしまったのが準決勝敗退の要因となってしまった。準決勝の戦い方のむずかしさを経験したはずだ。2年男子200mの岩下も、来年こそは大阪大会ファイナ

リストになってやると、闘志を燃やすべし！新キャプテンとなった自覚をさらに高めて100m11秒前半を来年度シーズンの春には達成したい。声を出せ！体幹をもっと鍛えよ!! 闘争心を持ってチームをまとめることで、男子リレーでも新たな歴史の1ページを切り拓いていこう!!! 最後に堤。3年スプリント種目が100mだけになって、層の厚さで敗退してしまったけれど、3年最後のレースで追い風参考ながら11秒52は立派だったよ。

- 3年最後の引退レースとなった。心地良い秋風と、つるべ落としの陽の短さが別れの季節を演出しているのだ。できる限り3年生部員の最後を見届けようとした。レースが終わったときにはひとりひとりと言葉を交わしたかったが、審判中でもあるので、全員に声をかけてやる事ができませんでした。この1年間すばらしいキャプテンシーを発揮した松尾は110mYHに出場した。アプローチで攻めきれずにインターバルが途中で4歩に。リード足が交互になっても上手にこなし、さらに最後の3台くらいはまた3歩に戻すという器用ぶりを発揮した。100mJHに出場した佐藤。いつもかげひなたなく、こつこつ練習を重ねる誠実な選手でした。ハードリングの技術はうまいが、あいだのインターバルの走りで刻みきれなかった。レースが終わって、トラックに深々と頭を下げる彼女には「お疲れ様。3年間よくがんばったね」と声をかけることができました。走り高跳びに出場した金川と三段跳びに出場した藤井翔太。とりわけ、納得のいく跳躍ができなかった金川には複雑な思いがあるかも知れないが、ピットに立つ2人の姿を目に焼きつけていました。高須賀の第1走者としての力強い走りも印象に残りました。秋澤は砲丸の重量が4kgになり練習不足もあり苦戦してNM。残念な結果になってしまったけど、最後まで続けてくれてありがとう。内村、走り高跳び1m53の記録を持ちながらこの総体に出場できなくても、毎日欠かすことなく練習していましたよね。凡事徹底ができる素晴らしい選手でした。それから、この総体には出場できなかったけど、



応援にかけつけてくれた3年生部員のみんな。山あり谷ありで、決して一筋縄ではいかなかったところがあったとしても、最後までやり切ったことこそが何よりです。お疲れ様でした。

